

## 令和2年度第1回北海道地方競馬運営委員会議事録

〔 日時 令和2年8月7日(金) 13:30~15:30 〕  
〔 場所 TKP 札幌赤レンガ前 5F ランダー 〕

### 1 開会

(競馬事業室 下堀参事)

### 2 あいさつ

(農政部 小田原農政部長)

- ・ 本日は皆さま大変御多忙の中、御出席いただいたことに感謝申し上げるとともに、日ごろから道政の推進はもとより、ホッカイドウ競馬の運営に御理解と御協力をいただいていることに御礼申し上げます。
- ・ 昨年度のホッカイドウ競馬は、平成6年以来25年ぶりに発売額が300億円を超える330億円を記録し、14億円あまりの黒字を確保できる見込みとなったところ。  
一方、今年度は新型コロナウイルスの影響により、門別競馬場は4月17日の開幕以来、無観客での開催を継続するとともに、場外発売所も6月中旬まで閉鎖を余儀なくされるなど、大変厳しいスタートとなっている。  
しかし、インターネット発売の伸びにより、昨日までの43日間では、発売額は25億8千万円と計画比で153%、前年比でも152%と、昨年度にも増して好調な発売となっている。  
これもひとえに、委員の皆様の御理解と御協力、馬産地やきゅう舎など関係者の努力があってのものであり、改めて感謝申し上げます次第。
- ・ 本日の委員会は、ホッカイドウ競馬の「概要」や「情勢」を報告したのち、現在の「第2期北海道競馬推進プラン」が今年度で終了することから、来年度からスタートする「第3期」のプランを策定するための方向性について御議論いただく。  
ホッカイドウ競馬は、発売が好調に推移しているものの、競馬の開催に必要な競走馬や騎手の確保や、老朽化が進む門別競馬場の基幹施設の更新など、競馬事業を運営していく上での課題は山積している。  
これら課題に対応すべく、次期プランもしっかりと将来に繋がる内容となるよう、策定しなければならないと考えているところ。
- ・ 最後になるが、委員の皆さまそれぞれのお立場での、忌憚のない御意見や御提言をお願いし、開会のあいさつとする。

### 3 議題

(1) 委員の紹介

(平本委員長)

- ・ 委員の変更があったので、事務局より説明願う。

#### 競馬事業室 太田主幹より委員3名の変更を説明

(平本委員長)

- ・ 副委員長が変更になったので、新たに選任する必要がある。事務局の説明にあったとおり、残りの任期を新たな委員にお願いしており、前副委員長であった小野寺委員からそのまま串田委員に副委員長をお願いしたいが、よろしいか。

〈委員からの異議なし〉

(平本委員長)

- ・ 異議が無いようなので、今日は欠席されているが、串田委員にお願いすることとする。
- ・ 今年度初めての委員会なので、簡単に改めて各委員の自己紹介から始めたい。それでは、初めに佐々木委員からお願い。

(佐々木委員)

- ・ 今回2期目を務める。よろしく。

(かとう委員)

- ・ 4期目か5期目。昨日まで日高にいて牧場巡りをしていた。よろしく。

(石川委員)

- ・ 2期目。昨年までインバウンド中心に旅行会社をやっており、中華圏のお客様のご案内をしていた。主に外国人観光客目線の考えを出していければと思っている。よろしく。

(佐藤委員)

- ・ 前任者から引き継いで2期目。よろしく。

(鳴海委員)

- ・ 平取町長だった前任の川上委員から残りの任期を引き継いで務める。当町は日高管内の軽種馬産地となっており、委員の皆様がお越しになられる際には、連絡いただければ色々に対応したい。よろしく。

(西村委員)

- ・ 2期目となる。よろしく。

(平本委員長)

- ・ 北海道大学経済学部勤務しており、専門は経営学。4期目になり、かとう委員の次ぎに古株に。よろしく。  
任期である来年12月までこのメンバーとなるので、よろしく。

## (2) ホッカイドウ競馬の概要について

- 競馬事業室 太田主幹より資料1「ホッカイドウ競馬の概要」及び資料2「R1年度収支結果・R2年度の取組」を説明。

(石川委員)

- ・ 道営の発売が非常に好調だが、これはやはり皆がネットを見るようになったということか。

(事務局 佃室長)

- ・ 公営ギャンブルの中で地方競馬が今一番売れている。全国平均で130%くらい、前年より3割以上多く発売している状況。中央競馬が前年比で100%を少し超えるくらい。昼に発売している地方競馬が売れていて、コロナの影響で在宅時間が増えており、恐らくスマホでも気軽に買える状況にあり、競馬が一番買いやすいのではと考えている。一方で、競輪はもともとネットの割合が低く、影響を大きく受けている。年齢構成も高齢者が多いというのもある。ポートは少し盛り返している。コロナの関係で在宅もまだ継続しているが、この先どうなるかは不透明。

(かとう委員)

- ・ インターネットによる発売が多いが、IPAT・SPAT4などにより手数料の率は違うものなのか。

(事務局 佃室長)

- ・ 手数料の率は1割程度だが、公にはできない。手数料率はもう少し下げられないかと、各方面からも言われ、各主催者ともに交渉したりしている。一方で、ネットの売り上げが大きくなっており、今後もそうした要求をしていかなければならないと考えている。

(平本委員長)

- ・ ネットが伸びて売り上げが伸びるのは良いことだが、場外発売所での他主催者分の発売が今年度は全然伸びていない。ネットは売り上げが伸びてもその分経費も掛かり、利益率としては下がると思われる。売上高でみると景気は良く見えるが、利益率が下がるのは経営的にはあまりよくない方向。大きな経費を下げる努力をしていくことが重要。

北海道を中心として地方競馬全体でプラットフォームを作り交渉力を上げていくことが必要。すぐにできることではないが、今後の方向性としては考慮して行ってほしいと思う。

(西村委員)

- ・ 日本馬主協会連合会でもこの話は出ており、ネット業者と交渉していこうと総務委員会で議論している。ホッカイドウ競馬だけでは全然交渉力が無いので、全国の地方競馬が統一して交渉すべきというところまで話が進み、今はコロナの関係でちょっと止まっているが動き出してはいるところ。ただ、SPAT4は南関東のシステムなので、ちょっとこれはまた別だが、馬主会としても努力している。

(平本委員長)

- ・ 是非、馬主会としてもそうしたロビー活動をしていただくことで、ホッカイドウ競馬の経営基盤の安定化にもつながっていくかもしれないので、よろしくお願ひ。  
トヨタの営業利益率も10%ない位らしいので、無条件でネット手数料を1割取られるというのは、それだけで赤字になってしまうというくらい大きな数字だと思う。1%減るだけでも大きく収支改善する。地道にかつ戦略的に交渉して行く必要がある。

### (3) ホッカイドウ競馬をめぐる情勢について

- 競馬事業室 太田主幹より資料3「第2期プランの取組経過」及び資料4「ホッカイドウ競馬をめぐる情勢」を説明。

(鳴海委員)

- ・ 楽しい競馬、見ていて面白い競馬というものには、出走頭数が重要だと考える。やはり10頭くらいは出走頭数を確保すべきと思うが、今後の見通しはいかがか。

(事務局 佃室長)

- ・ 最大の課題は春にどうやって馬を集めるか。2歳馬の7割が外に転厩してしまい、その馬が北海道に戻ってこないと3歳馬、4歳馬のレースが組めない。そのために、輸送費補助や、早期出走手当といった春に出走したら手当を厚くするなどの対応をこれまで行ってきた。その成果として昨年、少し馬が戻ってきて、昨年から50頭くらい在きゅう頭数が増えている。古馬のレースが少なくなっているが、そのぶん、2歳馬が出てきている。

いかに春に馬を戻すかがやはり重要で、今後もどのような対策が効果的なのか分析していかなければならないと考えている。委員の仰るとおり、少なくとも8～10頭いないと面白いレースとならないので、それを基本に対応していく。

昨年は一日に平均11.9レース、ほぼ毎日12レースできており、その中でも10頭近いレースを組めている。今年は、頭数が少ないレースが若干多いが、来年に向けて

も対策を講じていきたい。

今年は馬主会に協力いただき春に馬を戻すために1頭に100万円の購入補助を創設した。これは3歳の時に北海道に戻ってきてもらうことを補助の条件としており、馬の確保に努めている。やはり競馬は3歳が一番盛り上がるので、魅力ある番組作りにもつながるもの。JRAからも、地方競馬とともに売れる番組を一緒に検討し、盛り上げていこうという話になっている。いずれにしても、ファンに飽きられない番組展開をしていくことが大事。

(鳴海委員)

- ・ 町村会としても、協力していきたい。

(事務局 佃室長)

- ・ 今年のJBCは馬産地のレースとして地元の市町村の協力のもと開催していく。産地から全国に発信していくことが重要なので、一緒に盛り上げていきたい。

(かとう委員)

- ・ 年に数回、東京の情報発信力のある人を連れて門別で馬券を買ったりしているが、その時に言われたのが鳴海委員の仰っていたとおり、8頭立てのレースで1頭棄権してしまい、寂しいレースになった。やはりレースを見る魅力は馬の走る音を感じることも大事で、7頭と10頭じゃ全然違う。10頭以下が10レースあるよりも12頭で7レースの方が面白いのかなと素人考えでは思う。
- ・ もう一つ心配しているのは、騎手が今年18名になってしまったこと。実際に競馬場に行ってみて分かったが、毎回レースに出ている騎手がいることに驚いた。馬もそうだが、騎手の確保・育成にもっと力を入れていかなかったら、今後続いていかないと感じた。これについては、今後に向け何か検討していることはあるのか。

(事務局 佃室長)

- ・ ホッカイドウ競馬は1年で80日間しか開催できない。そのため騎手も80日しかレースに出られない。本州の他の地方競馬だと多いところで160日とかレースがある。そうすると、それだけ所得を得る機会があるので、北海道よりも向こうで騎乗する方が良いとなってしまうところがあり、課題であると捉えている。

(佐藤委員)

- ・ 私も、かとう委員と同じ意見。過去、一日のレース数を少なくするというのを見たことが無いが、これは何か法律等で決まっていることなのか。

(平本委員長)

- ・ これはつまり、1レースの頭数を増やす代わりに、1日のレース数を絞って多頭数の

レースを多くすることで魅力ある番組を作ることはできないのか、ということ。

(佐藤委員)

- ・ そう。それと、例えば賭け方で1着～5着まで当てるとか。1レースの頭数が少ないなら少ないなりに楽しめるやり方があるのではと思っており、馬と触れ合うこともそうですし、あるいは賭けることも楽しみであるなら、1～5着というのも頭数が少ないレースの方が当てやすいのかもしれない。素人考えで申し訳ないが、そういったことも検討されてきているのかもしれないが、いかがか。

(事務局 佃室長)

- ・ 競馬ではクラス分けがあり、それによって1レースの頭数が少なくなってしまう場面が出てきてしまう。地方競馬の体系は結構複雑になってきている。中央競馬はもう少しわかりやすく、1勝馬クラス、2勝馬クラスなどとクラス分けの枠が広がっているが、北海道はそこに更にAクラス～Cクラスなど細かく賞金ランクを分けている。これは出走馬を確保して対応していかなければならないためであると考えている。
- ・ 1着～5着当ては、ギャンブル性も高くても良いかもしれないが、払い戻しがある特定の人に行ってしまうことになる。そうすると、配当金で次のレースの掛け金に回すという人が少なくなってしまう面がある。  
例えば、万馬券が出ると盛り上がるが、実は主催者側からすると、たくさんの人に配当金が払われないことになるので、次のレースに賭ける人が減ってしまうことを心配する。そのため、できれば、1,000円程度のほどほどの倍率で当たってもらうほうが広くたくさんの人に配当され、次のレースにつながることになる。
- ・ 以前は賭け式も枠連・単勝・複勝のみだったので、一つの馬券に高額を賭ける傾向があったが、今は3連単など高配当の賭け方が増え、100円単位で賭けている。そういう意味では、1,000円が2,000円になるとか、その程度がいいのかなとも思う。

(平本委員長)

- ・ 主催者側の都合などいろいろあるが、検討の余地がある様々な面白いアイデアが出た。
- ・ 騎手数の減少は持続可能性の点から、私も非常に危機感を覚える。逆転の発想で、ホッカイドウ競馬の開催日数をもっと増やすということはできないのかと思うが、どうか。

(事務局 佃室長)

- ・ 過去、正月競馬などの取組をしたこともある。100日以上開催したこともあるが、雪で開催中止になるなどもあり、収支的には開催しないほうがマシとの結果だった。冬は馬場を凍らせてはいけなないので、そのための管理経費が嵩むこととなり、現在の開催期間となってきた。全天候型コースとしてドームにでも出来れば別かもしれないが、投

資額が莫大になってしまう。

(平本委員長)

- ・ 収支の問題から、冬季開催はあまり現実的ではないと。

(事務局 佃室長)

- ・ ただ、以前は今よりも4月のもう少し早い時期から実施していたこともあり、春先に馬が集まればレースを組める。今は4月の開催は週に2日だけ(注:普段は3日)としており、ここを週3日開催とすれば、あまり期間を延ばさずとも、あと10日くらいは開催日数を増やすことは可能。早くから馬が戻ってきてくれる。以前はそれだけ馬がいたからできた。
- ・ 一方で、今は道外に行った馬が、そこで冬の間にいいだけレースに使われ、疲れて戻ってくるので、休養を与えないと走ってくれない。3月に戻ってきてても5月ころまでレースでは使えないという状態になっている。他主催者も馬が欲しい状況だから、馬がいる間は走るだけ走らせる感じになっている。

(平本委員長)

- ・ 収支構造のイメージ図を見ると、いくらネットが売れてもその分、経費がかさむということであれば、経営的にはあまり健全ではない。この構造を少しでも変える必要がある。業務協力金を除けば収入より支出のほうが大きいという構造はやはりおかしい。売っているのに赤字、という状態。

(佐藤委員)

- ・ 例えば、レースに企業名をつけるとか、ゼッケンにスポンサー名を入れることで収入を得るとかはどうなのか。ゼッケンなら間違いなくレース中ずっと画面に映るし、少しでもお金になる取り組みをする。あるいはシーズンオフに騎手の方に乗馬クラブのようなことをやってもらうなど。そういうのはどうか。

(事務局 佃室長)

- ・ 企業協賛は、現在もやらせていただいている。ゼッケンなどはそういう取組も検討の余地はある。

(平本委員長)

- ・ 競馬場そのものやパドックなどのネーミングライツはやれないのか。法律的な規制でできなかつたりするのか。

(事務局 佃室長)

- ・ 現在、そういうことはやってはいない。規制上は問題ないかと思う。

(平本委員長)

- ・ 東大では、学内施設にネーミングライツを導入して収入源としている例もある。神戸大学でも70名規模の情報処理室で年間100万円を生んでいる。  
ポラリスドームなども、〇〇ドームと名前を付けても良いのでは。小さいところから大きいところまで、少しでも真水の収入源となる手法があれば、是非、検討してみてもよいかと。

(石川委員)

- ・ ホッカイドウ競馬では企業ではなく個人名を冠したレースなどはやっていないのか。

(事務局 佃室長)

- ・ それはやっていない。

(石川委員)

- ・ やってはいけない？

(事務局 佃室長)

- ・ やっていけないということはない。他主催者では個人的なレース名をつけている例はある。

(石川委員)

- ・ とあるライターが、Twitter で個人名レースの開催を呟いていることがあった。これも、ある程度著名な方にやってもらえれば、認知度が上がるのではと思った。

(平本委員長)

- ・ まだまだ工夫をすれば収入を得る手法があるのではと感じた。

#### (4) 第3期北海道競馬推進プランの方向性について

- 競馬事業室 太田主幹より資料5「第3期北海道競馬推進プランの方向性」を説明。

(事務局 下堀参事)

- ・ 騎手減少への対応について補足説明を。現在、地全協には騎手の養成学校があり、そこで勉強した若手を引っ張ってくるのが一番良いが、少子化もあり、なかなか人数が少なく厳しい状況。
- ・ 一方で、例えば冬期間に、南関東やJRAのレースにホッカイドウ競馬所属のまま騎手や調教師等が向こうに一定期間滞在し出走して収入を得るなど、そういったこともできないか考えている。

(西村委員)

- ・ 冬期間の収入については、金沢と笠松では、金沢が冬に休みの間、厩舎ごと笠松に移動してレースに出る、ということを行っている例がある。

やはりファンを呼ぶには強い馬を作ることが一番。北海道の馬づくりは全国と比べても環境が良く、屋内坂路も使える。道外の調教師が3月に見に来て、馬の筋肉・体形を見て驚く。そのくらい道営は施設が整っているということ。

ただ、最近、道営出身馬が南関東のダービーなどの大きなレースで勝てなくなっている。これは、関東の競馬場の努力が出てきているということ。賞金の高いところでは、そういった競馬場では北海道へのライバル意識がある。

北海道の騎手などが出稼ぎしなきゃならない賞金体系、日数や冬も開催といったアイデアも出たが、冬期間の砂が凍っている状況では、乗り手の筋肉も動かず、馬も同じで危険な状況。一年間の中でどこかで休みを持つことも重要。

- ・ 競馬がなぜ最近売れているのか、生産者の方でも分析していて、コロナ禍の中、在宅が増えていることや、スマホ世代は自分の空間で手軽に馬券を買えるという環境が今の世相にマッチしてきたのでは。テレビ・ドラマはリアルではない一方、競馬はリアルのライブ映像。事務局の説明でも画像の高画質化などの取り組みの話が出ていたが、今後、それがもっと加速していくのでは。リアルでストーリーのある競馬作り、そこからヒーロー・強い馬を出していくことが大事なのは。

今年やってもらいたいのは、JBC 2歳戦、これを全国的にPRして盛り上げてもらって、日本一の2歳馬を決める場なので何とか盛り上げていただきたい。

(平本委員長)

- ・ 強い馬づくりが一番重要だという、生産者の立場からの力強いご意見。

(石川委員)

- ・ 競馬ど素人からの意見として、まったく競馬を見たことが無い人にどうやって知ってもらうか、門別に來ってもらうのか、という観点から。若年層への発信としてInstagramを使うことは検討されているのか。

(事務局 下堀参事)

- ・ FacebookとTwitterはやっているが、Instagramはない。

(石川委員)

- ・ 今は若年層を対象とするならInstagram。私も調べてみて、道営のInstagramは無いなど思っていたが、ハッシュタグ「#ホッカイドウ競馬出身馬」とつけて発信している方がいて、魅力的な馬の写真が上がっている。関係者が作るサイトの写真だと、レースやゴールシーンなど、ど素人から見るとみな同じ写真に見える。パドックの馬の表情な

ど、絵として惹きつけるものがある。

- ・ そのほかに、競馬場の美しい環境やおいしい食事などを発信することで、若年層に来てみたいと思われるかもしれない、こういうところで働いてみたいと思うようになるかもしれないなどの効果を期待できるのでは。是非、若年層に向けた発信を検討していただきたい。

(かとう委員)

- ・ 10～20代は7割以上がTwitterから情報を得ているところがあり、自ら見たいものを検索するのではなくタイムラインに流れてくる情報を見ている。そこから情報源に入っていくという行動。従って、ホッカイドウ競馬でも情報発信する際には、そういったターゲットの見る時間帯を意識した発信も重要。

またInstagramは女性が多く、それに合った写真を使うなど、ターゲットに合わせたSNSごとの使い分けも大事になってくる。スマホとの連動や会員限定コンテンツを作って特別感を演出するなど、波及させる工夫も必要では。

(事務局 佃室長)

- ・ 競馬場では女性の方が写真を撮っている場面が確かに多い。女性がカメラを持っている。若い女性に来ていただける取り組みは必要だと感じる。まだまだその辺が不十分で、工夫しながら取り組んでいきたいと思う。

(平本委員長)

- ・ 例えば、門別競馬場のフォトコンテストを行うなど、馬券を買う以外の目的を作って、そこをSNSと連動させる取り組みなどもできるかもしれない。それほどコストをかけずにできることなので、是非、検討いただければと思います。

(かとう委員)

- ・ 資料の「目指す姿」で「競馬ファンに」愛されるとなっているが、ここは「道民」を入れてほしい。競馬ファン=おじさん のイメージ。以前の委員会では「馬文化」、「開拓時代は馬が家族のようにそばにいた」という言い方があった。馬産地にある競馬場は日本でも門別だけということ、を、「目指す姿」のところに表現してほしいとの思い。ここじゃなくても、どこかに「道民」という視点を入れてほしい。
- ・ また、騎手・厩務員の確保がもっとも重要と感じた観点から。修学旅行の活用として、本当は年齢的には中学生が最適だが、高校生でもギリギリ良いと思うので、全国の農業高校に向かって、修学旅行の立ち寄り先・教育施設として競馬場を開放し、子供たちが夢を見られるような取り組みが良いなと思っている。

昨年、自分で企画して道庁若手職員と新冠町や日高町をめぐる競馬の旅をした。ビッグレッドファームと下村牧場に寄らせていただいた。功労馬を家族のように育てている下村さんと、色んな人にどうぞ来てくださいと門戸を広く開けているビッグレッド

ファーム。感銘を受けたのは、ビッグレッドファームのマネジャーの話で、職員を雇うのは簡単なんですよと。一部上場企業と同じ待遇を示して、馬の好きな人を募集すれば、とても優秀な人が来てくれますと話してくれた。実際、職員は皆、礼儀正しく素敵な人しかいない。そういうところも、修学旅行で見せるのも、すごく良いと思う。

半年しか開催できないから、冬は関東に行くとか、それもそうだけど、利尻島・礼文島などは夏の3か月で一年分稼ぐ給与体系でやっているのだから、厚遇にするというか、目に見える形で夢を持てるようなシステムにしないと、担い手を育てなければ、文化が無くなるという危惧を持った。

(平本委員長)

- ・ とても重要なこと。騎手と厩務員の確保は大事。厩務員は外国人の方を雇用して数を確保しているという話だったが、騎手も外国人がなれるのか？

(事務局 佃室長)

- ・ なれる。(地方競馬では月単位の短期免許のみ)

(平本委員長)

- ・ もちろん、安い賃金で雇えるからというのではなく、門戸を広げるということも重要と思う。馬に携わりたいという熱意のある方にたくさん来ていただき、より良い待遇とすべき。

(佐藤委員)

- ・ 馬産地に立脚した競馬場というのが「売り」というのではなく、北海道の食などを活かしては。例えばレディースデーで、来場したら無条件で何か野菜などをプレゼントするとか。
- ・ 現在の修学旅行に求められているのは「体験」。馬の調教の場を見せる、走らせるとか。競馬場を使っていない冬場に、雪合戦をさせるとか、無料で開放することで旅行の仕向け先をこちらに向けさせることができるのでは。そういう情報が学校や旅行会社に伝わるかどうか重要で、そういう努力はしていかなければならない。幅広く来てもらうことで、問題となっている騎手や厩務員になろうとする人が出てくるかもしれない。
- ・ また、北海道で競馬をやっている時期は、そのまま北海道の一番いい季節でもある。指定席を旅行会社に優先的に与えて、それを使う商品を作るのもあるのでは。

(事務局 佃室長)

- ・ 現状、指定席は無いが、今スタンドを増設しているのだから、そこを活用した新たな取組というものも検討していければと思う。

## 【まとめ】

(平本委員長)

- ・ 本日、委員の皆様からいただいた意見は、
    - 収支構造の改善
    - ゼッケンへのスポンサー表示や著名人を活用した発信
    - ネーミングライツなどの新たな収入源の開拓
    - 番組の魅力向上や駆け引きの工夫の余地があるかどうか
    - 競馬はリアルでストーリー・ヒーローづくりが重要
    - Instagram や Twitter による発信や連動をもう少し強くすること
    - 目指す姿として「道民」というキーワードを忘れてはいけないこと
    - 修学旅行・観光の商品パッケージとの連動
- など、具体的な指摘も多く、プラン策定の参考になる議論をいただけたのではないかと思う。

(事務局 下堀参事)

- ・ 委員の皆様のご意見に感謝。今後の委員会スケジュールは、11月に素案を議論いただき、そのあと年明けにパブリックコメントを募集、2月に最後の委員会の開催を予定。

(事務局 佃室長)

- ・ 貴重なご意見に感謝。いただいたご意見をもとに、プラン策定に取り組んでまいるので、引き続き、今後ともよろしく願います。

(平本委員長)

- ・ 最後に締めてからで申し訳ないが、もう一つ、議論としては施設改修・整備も大きな柱の一つになるので、11月の次回委員会に向けて皆様ご準備いただければと思うので、よろしく。

(以上)